る。此の記事を讀むものは、之を以て此の地に住んだ回鶻部に唐代から既に佛教の流行した徵證と見るかも知れないが、然も高昌の地はその名が漢の高昌壁に基いて居ることからも察知せらるゝ通り、古くから漢人の住んだものも少く無く、其の後漢文化を有し佛教にも關係淺からぬ北涼の沮渠氏の末が移り住み、ついで闞氏が初めて高昌王と稱して以來こゝに王たりしものは皆漢人で、殊に魏の太和二十一年頃(497頃)からは麴氏の家が續いて、唐の太宗の時に及んだものである。太宗の時代麴氏を中心にしての此の地の佛教信奉の有樣は、慈恩傳によつて推知することが出來る。無論こゝには漢人以外トルコ族も居り、その他にも龜茲焉耆地方に住んだのと同種の人民も住んでゐたに違ひないと思はれるが、王延德の書いて居る唐代給ふ所の寺額や藏經經音等を有するは、主として漢人の寺院を指したものと見て過らないであらう。然しながらこゝに述べた所は只王延德の記事を如何に見るべきかについての考を述べたに止り、當時回鶻に佛教の信仰が行はれなかつたと云はうとするのではない。延德の歸國と同時であらうと思ふが、雍熙元年(984)回鶻の可汗は婆羅門僧の永世といふものを、波斯の外道阿里延と共に回鶻の使として宋に入貢せしめて居る(宋史回鶻傳)。婆羅門僧といふのは宋史天竺傳に、其の國を婆羅門ともいふと記して居ることから考へても、佛教僧侶と見るべきである。更に之より少しく以前、卽ち乾德三年(965)には西州卽ち高昌の回鶻可汗が僧法淵を宋に遣して、佛牙琉璃器琥珀盞を獻じたことがある。[2] 凡そ唐代の回鶻では、次にも述べるが如く二元教なる摩尼教が盛に行はれたもので、從つて其の國からの使には、常に此の教の僧侶が從事したものであることは周知の事實である。然るに宋の時代になつて、佛教の僧侶もかゝる役目に任ぜられて居ることは、當時佛僧が漸次其の國に重んぜられ、佛教の信ぜらるゝに至つた一證と考へられる。